

「幸吉の旅」



東京女子高等師範學校教授 岡田 みつ

七

子供達が泊つた翌朝、加藤のお鎌さんは、眼を覺まして、何だか變はつた事が起こつたやうだつたが、何であつたらうと、頻りに思ひ出さうとした。今日は土曜日で、パンを焼く日だが……そのせいでもないし……室の窓掛を眺めたり、壁の額を見詰めても、さて、何であつたか考へ出せなかつた。

するとどこか遠くの室で、子供の晴れやかな、可愛らしい笑ひ聲が鳴り響いた。あさうであつたと、お鎌が思ひ出した拍子に、お崎が戸を開けて

中を覗きこみながら、

「朝の御飯の支度は、大方出来ましたが、あなた、着物を着換へなすつたら、すぐ階下へ來て食事の方を見て下さいな。私あの赤ン坊に、お湯を使はせたいんです。あの子は、今まで水の少ない所に居たと見えて！」

と言つた。

「あの子達は、もう目を覺ましたの。」
「覺ましたどころぢやありません。明るくなつたら、もうすぐに男の子がまだ目を覺まさない内から、菊ちゃんきくちゃんは、室の戸をドン／＼叩いて、お崎ちゃん！ お崎ちゃん！ つてどなつてゐ

るんですけど。……どうして私の名を覺えたのだから、驚きますよ。喧ましくてあなたが目を覺ましておしまひなされるだらうと思つてネ。……

「あの子達が、この家に逗留してゐる間は、チャンとした服装をさせて置きたいぢやありませんか。男の子の方は、どうしてやり様もないけれど、おまささんの着古しが、納戸にあるから、あれを使つたら、宜からうと思ひますがネ。」

お鎌は、言葉少なく、

「私も、昨夜さう思ひついた。靴の鍵が、小箆の抽出しにあるから。お前は、子供の世話をしておやり。私か食事の方をするから。彌平は來たかい。」

「いゝへ。ぢきに來ますツて言つてよこしたんですが、彌平爺さんの『ぢき』だから！」

お鎌さんは、塵一つない臺所で、暮をフライにしたり、お茶を沸かしたり、餘分にパンや牛乳を

並べたりして朝飯の支度をしてゐた。二階からはこの静かな家には珍らしい物音が聞こえて來た。

お鎌は、心に考へた。

「お崎には迷惑な事だらう。人が大勢來たり、家がゴタ／＼するのが嫌ひな人だから、子供の世話をお崎に押し付けるのは、よくないかも知れない。一時我慢しなくツてはなるまいと言つてはゐるが、長くは、とても辛抱しきれないだらう。」

ところが、お崎は、戸をバタンと閉めたり、バケツをガラ／＼音をさせて、態と不機嫌な振りをしきりにしてゐたので、菊嬢が、鹽の中で、歎びの聲を揚げて、お湯をたゝいて、四方を水だらけにした時も、怒つたやうな聲をしようと、大いに努力したのだが、何年にも感じた事のない嬉しさが、絶えず込み上がつて來てしようがなかつた。

やつとお風呂を濟ませて、古い革靴から取り出

した衣服を菊ちやんにあてゝ見ると、少し丈が長すぎるのであつた。今あれを縫ひ縮める暇がないのでそのまゝそれを着せると菊嬢は、正しく、世を忍ぶ姫君かと思はれる程の趣があつた。

奇麗な衣服を着た嬉しさに、菊ちやんは、髪を梳いてもらふ間もじつとしてゐないのだつた。お崎は、その捲き縮れた髪を、骨ッぽい指で弄りながら、衣服と一緒に入つてゐた装飾品を、この子に付けてやりたくて仕様がなかつた。心の中では、そんな事は、いけない。一晚泊めてやつただけの宿無し兒に、装飾なんて、不相應な事だと、言つてみるものゝ、金細工の稻穂のブローチを肩に止めたり、珊瑚の玉の首飾りをかけてやりたくて、指がうづくした。

お化粧がすんで、お崎が盥の水を流してゐると、菊嬢は、鏡臺の上に攀ぢ登つて、鏡に寫つる自分の姿にお辭儀をし、こんどは降りて、今迄の衣服

を一まるめにして、お崎が阻止、暇もないうちに窓から下へ投げ落としてしまつた。

「あたり、きたないおべっ嫌ひ。といつて、にこり微笑んで「あたちきれいなおべっが好き！」といひながら、戸の取手に手を伸して、片手でお崎を招いて、

「はい、ちやい！ 菊ちやん、遊びにゆくの！

お崎ちやん！ 菊ちやん、遊びに連れてつて。」

今は、小言をいつてゐる折もないので、お崎は菊ちやんを、そのまゝ食卓へ連れていつた。そこには幸吉が、お鎌さんと馴染になりかけてゐた。お鎌は、入つて來たお崎を心配さうに、チラと見ると、お崎が、呑氣さうにしてゐるので、内心重荷を下ろしたのだつた。なるほど、お崎の顔は和んで、口元など、いつもの一文字に結んだのでなく、何となく、ふつくりと笑みを含んでゐるかのやうであつた。心に隠してゐる嬉しさのせいで、

顔の色も紅味あかみを帯び、菊ちやんの悪戯いたづらでいつもに
なくほつれた鬢びんの毛が、捲き縮れてなまめかしく
さへ見えた。つまり、お崎は、すつかり、美しく
なつたのである。

幸吉は、たゞ、もう、菊嬢に見惚みどれてゐて、お
よそ、眼を備へた人間で、こんな、可愛い、美し
い子を上るといふのに、いやだといつて斷る氣
に、どうしてなれるのかしらと、考へてゐた。

菊嬢は、毎朝お化粧をされる癖がついてゐない
ので、始めは、嫌がり切つたが、お風呂へ入つた
のと、あばれたお蔭で、頬は櫻色なりに、眼は美
しい光を帯びてゐた。そしてお崎に對しても機嫌
を直し、お鎌とも親しまうとし、あらゆるものに
好意を示してゐた。ひとのうちの厄介ものである
ことなどは、この子には一向苦にもならない事だ
つた。臣下の邸を訪れた帝王だつて、これほどの
氣品と應揚さとして、振舞へるかどうか分らなかつ

た。大きな本を積み重ねた上に載せられて、食卓
に對ふと、菊ちやんはすぐに、牛乳のコップに、
ブク／＼泡を吹き立て、そしてハハ……と高い
笑ひをして、人々の顔を眺め渡した。その姿の、
あどけなさには、鬼の心をも、とろけさせずには
置かなかつたらう。

幸吉は、菊ちやんほど吞氣ではなかつた。年こ
そ、まだ行かないが、この子には少年時代の「朗
らかな朝の光り」は、すでに消え失せて、「經驗」
といふものが「歡喜」を鎮め落着かせてしまつた
のだつた。

××××××××

幸吉は、庭で遊んで来いといはれたのだ。生れ
て初めて、遊びに出されたのだ！ 彼は、十五分
程、庭にゐて、それから、有頂天になつて、家の
方へ駆け戻つて、

お崎を、グン／＼引張つて、

「ネ、お崎さん、僕に話さなかつたネー……お庭に、川が流れてゐるよ。海ほど大きくないし、港の水ほど、静ぢやないけれど、川の子供みたいなのが、可愛い音をさせてドン／＼流れてゐるの。小母さん、（お鎌のこと）菊ちやんに見せてやつていゝ？ それから、僕ボチをあの川で洗つてやつたら、いけないでせうか。」

「みんな行かせたらいゝ。」と、お崎は提案した。「彌平爺さんが、往來をぶら／＼やつて來たから、子供たちを遠くへやつておくがいゝ。」

「お崎や、今日は、彌平をさういぢめなさんなよ。」

「だつて、まア、ごらんなさい！ あの人昨日から、一層背が高くなつたやうだ。子供の時にしつかり足で立つてゐれば、あんなに「のッぽ」にならないうで濟んだらうに。」

年中、塀の上ののつかつて、足をブラン／＼垂

らして居たから、足の取手が伸べ放題のびてしまつたんで——もう今更しようがないんだ。ほんとに、あの爺さんには困つてしまふ。」

「彌平にも、感心なところが澤山あるよ。」とお鎌は庇護ふやうに言つた。「あれは忠實だ——どこにゐるか、いつでも居所か分つてゐるし。」

「それは、さうですとも。」とお崎は言ひかへした。つても居所が分つてるツて、その筈ですさ始に居たところから動かないシなもの。信心を始めたつてあんまり「足にはなりませんまい。極樂の門が、今日限り開かないンだからつて、人が爺さんに言つてきかせたつて、眼の前で門が閉まる音をさくまでは、中へ入らうなんて考へ始めもしないだらうから、そして極樂へいつてゐる氣か何かでゆつくりと坐りこんで、まあ、いゝや、またこの次に開く時にしよう。」緩くりしつかり」といふのが俺の世渡りの道だなんて

言ふんでせう……………お早う。彌平さん。お晝のお飯は？」

「まだ、朝の飯も食はねいんだよ。」と、呑氣に、彌平は答へた。

「怠惰者は得だネー、ひとが、みんな仕事を片付けてくれるから。」と、お崎は、彌平の食べものを、出しにゆきながら、手酷く、やつつけた。彌平は、臺所と食卓のところに、腰を据えて、

憎い程平氣でニヤ／＼して、

「俺はな、お天道様が上るとすぐに、床から跳び起きたつて、餘計仕事が出来るとは思はねい。それよか、まア、お天道様にすこしばかり、先に起きてもらつて、その暇に、あら、もうひと眠りする。それで、丁度宜いんだ。緩くり、のんきに、その方が、涉がゆくつてもんだ。お仙の奴、よく、おれに言つたつけ。さう朝寝坊し、よく恥かしくないつて、あら、いつも、か

う言つてやつた。ウン、そら、恥づかしい、があらア、早起きするよか、恥かしい方がいゝつてよ。だがな、お崎さん。おめいさん、料理は巧いなア。始終、がちや／＼せわしがつて、おまけに、口が悪いけれど。」

「私の惡口なんぞ、いはない方がいゝだらうよ。」とお崎は噛みつくやうに言つた。

「全くだ」と彌平は、食べながら、性が善さうに笑つてゐた。彌平は、大喰ひだつた。それが、また、お崎に氣に入らない事なのだつた。

「爺さんは、何だつて、あんなに瘦こけて、骨がガタ／＼してゐるンたらう。食べることといつたら、人並に食べるくせに、それが肉になり、脂になるようにとしないのなもの。」といつては、小言をいふのだつた。

お崎の作つた朝食が、彌平の大きな、口へドシ／＼連ばれてゐるうちに（爺さんは蒸汽罐に石炭

を投り込むやうな食べ方をする男だつた。彌平の眼は、薪箱、上にある物に留まつた。彼はナイフを置いて、

「はてな、どこで、あの乳母車を、あら、見たかしら。さうだ！ 昨日だ。あの子供ら、此所へ來るところだつたのか。エ？」

「どんな子供さ？」とお鎌さんは、びつくりして、お崎と顔を見合せながら尋ねた。

「彌平さん、また例の、事の起こりの、そも／＼から、始めないでよ。いきなり、結末のところを話さない。」とお崎が口を出した。話の種を山程持つてゐて、中々言ひ出さない人位、自烈つたいものはないのだつた。

爺さんは、饅頭を頬張りながら、

「まア、ちつとは、考へさせてくれるよ。待てば海路の日和、て事がある。おめいさんには、もつて來いの譬喩だ！ 子供らに何處で遇つた

つていふのかね。エ！とあの四つ辻ンとこまで乗せて來てやつたよ。」

「ほんとかへ？ さうとは、知らなかつた！」

とお鎌とお崎は、聲を揃へて言つた。

「あゝ、停車場の少し此方で、路傍にゐたのを乗せてやつたんだ。それ、あの桃が岡の頂邊のところだ。あの小僧が、赤ん坊を籠に入れて曳張つてゐたから、ちいとばかり、乗せてやらうと思つて、あら、かう言つたんだ。沼の方へゆくのか、深瀬の方へ行くのかつて。したら、深瀬の方だと言ふから、そんなら乗りな、急ぎでなければ、連れていつてやらうつて、あら、さう言つたんだ。それでな、小僧が乗つてよ、それから、赤ん坊も乗つたんだ。それから、もう大分こつちへ來てから、あら、不意と思ひ出したんだ。四辻ンとこ曲つて、星野の後家乗つて來てやるんだつたつてことをさ。で、あら、

かう言つたんだ。

あら、もうこれから先へは行かれぬいが、お前達あとの路は歩けるだらうッて。したら、小僧が歩けるでせう」ッて言つてね、丁寧に、禮を言つたつけ。それで、あら、また、以前の通りみちばたに、路傍に降ろしてしまつたんだ。」

「お前、何處の者で、何處へ行くのだつて、訊いてみなかつたのかへ。」

「ちらア、用もない事、尋ねたりしない質たちでなア。」と爺さんは、澄ましてゐた。

「さうだ、尤だ。」とお崎は、鍋をガチャ／＼いはせながら、「その代り、こんだ、お前さんが、誰かに何か尋ねたくなつても、その時は、相手が、オイソレと返事はしてくれまいよ。」

彌平爺さんは、お崎の不氣嫌を面白がつて、笑ひながら、

「おかみさん、あの子供は、あんたの何かです

かと尋ねた。

「ちがふ」と、お鎌は、一言いつた。

「ぢや、どうするつもりなんです。」

「まだ、決定ちめつてないんだよ。家庭かうけいも無いし、親戚おかしもないと言ふから。うちで、行き場所を探してやらなくてはなるまいと思ふんだか、もしかしたら、都會まちへ連れていつて、養育院へでも入れてやる。その位の事をしなくツちやならないかも知れない。」

「どうして、この家へ来たんです？」

「昨日、都會まちから逃げて来たんだつて、そしてこの家の様子が氣に入つたんだ。つていくら訊いても、それだけしか分らないんだが、みんな、出鱈目でたらめの嘘うそかもしれないね。」

「あの男の子が、なんで嘘うそを吐くものですか。」

とお崎は簡明に答へた。

「人は外見みかけによらないといふぢやないか。」と、

お鎌は引き取つて、とにかく彌平や、隣り近所の人には黙つておいで、それから、お前、今日の格別の仕事があれば、四阿の屋根を繕つておくれ。それと青菜を抜いて來てもらひたいが、子供達と一緒に連れていつて、どんな風だか様子を見ておくれ。今、庭で遊んでゐるから。」

「承知しました。一つ見抜いて來ませう。だがその爲に、おらの仕事が涉取らねいかも知れませんぜ。暇なんか潰れたつて……」

二時間経つて、お鎌さんが、臺所の窓から見ると、庭の方からこつちへ歩いてくる爺さんの姿が目に入つた。

爺さんの傍に、幸吉が片手に、青物の入つた籠を提げ、片手を、爺さんの大きき手に曳かれ、嬉しさを眼を上げて、何を饒舌つてゐるのか、

囁く小鳥のやうに口を動かしてゐた。菊嬢はといふと、大方さうだらうと誰もが豫想する通りに

爺さんの肩に登つて、片方のちいさな手で、爺さんの、古ぼけた麥藁帽子を引掴み、もう一方の手には榛の木の鞭を持つて、お馬だといつてビシヤ／＼爺さんの頭を叩いてゐた。

お崎は、お鎌の後ろから、殴いて、微笑みながら、言つた。「あれで、爺さん、子供を見抜いたわけかい。子供の方で、爺さんを見抜いてしまつてゐる」

彌平は、子供達を戸外に置いて、籠を持つて、入つて來た。それから、帽子を、薪箱の中に入れて、股引を事々しく、つまみ上げて、腰掛に坐りこんで、

「あれア、どうも、宿無しにして、世界中、ほつつき歩かせる子供ぢやねい。さうかつて、養育院たら、貧民院たらいふ所へ入れるやうな、ありふれた子供とも違ふ。世間にア、とても鈍間で、そして、手におへねい餓鬼もゐるけれど

あの子供らは、そんなのどちがふ。赤ン坊の方は、あしやつて、小ざつぱりした姿くらさせると、

こゝ。な邊にア、あれほど、きれいな子は居ねいよ。それに、まるで日光の斷片アチみたやうに、

明るい子でなア。あんな子貰へるもんなら、あら、ちつとなら、金出してもいい。男の子の方はなア、——あれア珍らしい子だ。あれと雙生兒おぼへみたやうに、よく氣が合ふんだ。あの子は、賢いよ。考がある。だから、今に成人おとなくになると——エーと、何にでもなれるよ。」

「そんなに感心するなら、お前貰へばいいぢやないか。あの子達は、誰か貰つてくれさうなものだと思つてるんだよ。」とお鎌がいつた。

「あらア、さうするかも知れねい。」と、彌平は案外早速に返事をした。「どこか、いゝ家が見付からなかつたら、あら、引取るかも知れねい。

あゝ！ お仙が生きてゐれば、今すぐでも、貰

ふがなア。今のちらんこののは、あんまり賛成もしまい。子供 育てるのは好きぢやないからそれにしても、煉瓦造りの何々院たら言つて、一間もある高塚のある家へゆくよりは、何層倍も増した。おれたちの方がよつぽどあの子達の爲になる。村の人達に對つて『ちよつと見なさい。こゝに、こんないい子供がゐる。無賃むちんで貰へるんだぜ。家内を貰つたり、子供を産ませたりする面倒がなくなつて、子供が持てるんだどうだい、こんなうまい話つて、滅多に無からう。』ツていふ風に言ふんだな。」

「もう、全く／＼その通りだ。」と、お崎は、答へた。彌平のいふことに賛成するなんて、嫌でたまらないのだが、爺さんの雄辯と理の當然とて、思はず、お崎の口から、その言葉が出てしまつたのだつた。

「まあ、考へて見よう。」とお鎌は、當らず障ら

ずの返事をした。「少し、探して、行き場所を見付けるまでここに置くより他の法はあるまい。」

「それに、勉強することがまるで、放つてある。ほんとに申譯のねいこった。あの子は學校の中、睨いた事もないんだらう。今朝、おらいらんな事、ずいぶん教へてやつたけれど、すかンぽも知らなければ、薄荷も知らない。夜になると鳥がどこに寝るのかも知らない。小川を見た事もない。蛙も見た事がないんだ。やればれ! あんまり饒舌つてゐたもんで、四阿の屋根のこと、すっかり忘れてしまつた。かうしちや居られねい。やつて來なけりア! あゝ、勞働者にア休息はねいんだから。」

「仕事がなかつたら、なほ、困るだらうに。」とお崎が一本ツツこんだ。

「どうだ〜。あゝ、お崎さん。あめいさん直してくれつていつた箱は、何時入用んだ?」

「草の刈入れ前に欲しいと思つたけれど。お前さんの事だから、まあ、大晦日といつておかう。」

「するからには、念入れて、ゆつくりといふのが、おらの主義だけれど、他ならないお前さんだから、ひとつ大急ぎで、今夜、釘を打つてやらう。彌平も男だ、うそは吐かねい!」

(つづく)

